

近畿大学仏教文学会事務局顛末記

藤巻 和宏

2014年1月より、「仏教文学会」代表委員として事務局を預かっている。本稿は、2年間の学会事務局業務の覚え書きとして、また、本学において今後学会事務局を引き受ける教員の参照に資することもあればと考え、記録として残しておくものである。

仏教文学会概略

仏教文学会は、半世紀以上の歴史を持つ学会である。1962年に「仏教文学研究会」として発足し、会誌『仏教文学研究』を1976年まで刊行した。翌1977年に会誌を『佛教文學』と改め、1979年に「佛教文學會」となった。現在は表記を新字体に改め、『仏教文学』『仏教文学会』と称している。

会則では、本学会の目的を「仏教文学と、それに関連する諸分野の研究」と定めている。「仏教文学」の定義についてはあえて詳細を記していないが、これまでにその定義や範囲をめぐる議論が積み重ねられてきた。日本文学を主たる対象としているが、「日本」「文学」以外の領域の研究を妨げるものではない。

本稿を執筆している2016年1月現在、会員数は518名。日本文学研究の領域では中規模の学会といってよい。

本学会も含め日本文学系の20の学会で構成される日本文学関連学会連絡協議会という組織がある。この20学会が日本文学系のすべての学会という

わけではないが、主要学会といって差し支えないだろう。連絡協議会の幹事学会を務める上代文学会、中古文学会、中世文学会、日本近世文学会、日本近代文学会の時代別5学会がやはり規模も大きく、日本文学研究の中心的な地位にある。日本文学全時代を対象とする学会も存在しているが、会員数はそれほど多くはなく、中心となる学会とは認識されていない。実質的には、最大規模の学会として各時代別学会があり、仏教文学会・説話文学会・和歌文学会……等のジャンル別学会がその下位にある（制度上ではなく、多くの研究者の意識として）というのが現状である。

本学会は、これまで京都の仏教系5大学（大谷大学・京都女子大学・花園大学・佛教大学・龍谷大学）が本部事務局を担当することが多かった。原則として関西に本部を、関東に支部を置き（本部が関東になったこともある）、2年で移動という方式で運営してきたが、前事務局（本部龍谷大学、支部専修大学）をもって支部制を廃し、単一事務局制となった。2012年度から大会開催時期や会誌刊行時期を変更する等、大規模な改革がなされ新体制に移行したが、支部制は新体制への移行措置として、前事務局まで維持された。

学会事務局受け入れの経緯

近畿大学は、世間からはマンモス大学というイメージで語られることが多いものの、大学院総合文化研究科は修士課程までしか設置されておらず、大学院生数は少ない。学会事務局を引き受ける場合、教員だけで事務局業務を捌くのは至難であり、多数の院生の協力を必要とするのが普通であろう。

前本部事務局を担当した龍谷大学では、専任教員のうち3名のほか、複数の非常勤講師、そして大学院生約10名が本学会の会員であり、全員で事務局業務に当たっていた。それに比して本学では、会員は私1人であり、戦力という点では比較にならない。まして、支部制を廃した状態での事務局受け入れは、絶対に不可能であろうと考えていた。

私は大学院修士課程在学中の1996年に仏教文学会に入会したが、委員に選出されたのは2010年4月からであり、本学会の運営に携わった経験は浅い。また、40代という年齢を考えても、自分に学会代表が回ってくることは想定外であった。しかし、前事務局の2年目になってもまだ次の事務局が決まらない状態であり、2013年6月に、次期事務局の受け入れを打診された。

私はこの時、例会委員長という立場であった。以前より、学会運営は通常の委員のほか、編集委員と事務局運営委員とによってなされていたが、2012年4月に新体制に移行した際、広報委員と例会委員とが設けられた。2011年12月の委員会で両委員設置が決議された場で私が例会委員に指名され、翌年3月の委員会までに10名の例会委員を組織して委員長を引き受けたのである。

選挙によって選出される通常の委員（旧体制下では選挙で選出された40名と、当選者により推薦された若干名であったが、新体制下では選挙による45名のみ）と、事務局運営を補助するため事務局校関係者が指名される事務局運営委員は、事務局移動にともない2年ごとに入れ替わるが、業務内容の継続性を考慮して、事務局交替とは運動しない小委員会の必要性が指摘され、既存の編集委員に加えて新たに広報・例会両委員が設けられたのである。このことは、同時に事務局業務の負担軽減という意味合いもあった。新体制下では、例会を年に3回、大会を年に1回開催することになったが、これまで事務局業務の範囲であった例会・大会の企画のうち、例会企画を例会委員が請け負うことになったのである。必然的に、事務局と連携して業務を進めることになり、次期事務局の受け入れを打診されたのは、このあたりの事情とも関わっていたように思う。

2013年6月に、私のほかに摂南大学准教授の橋本正俊氏（委員・例会委員）も次期事務局を打診されていた。委員のうち、50～60代の研究者数名に打診したものの、よい返答をもらえず、異例ではあるが40代の研究者への打診となったと思われる。橋本氏も私も、経験不足等を理由に躊躇したが、このままでは学会休会の危機であると考え、継続する方法を模索した。

そして至った結論は、「事務局受け入れのハードルを下げる」というものである。龍谷大学のように、多数の教員・院生の協力を得られる環境にある少数の大学が事務局を担当するというケースがこれまで多かったが、それは結果として特定少数の大学に負担が集中し、その一方で、それ以外の大学や機関に所属する委員は、一度も事務局を担当することがないということになる。選挙で選ばれた委員のなかで、このような“格差”が生ずるのは望ましいことではない。そこで、院生の少ない／いない大学・機関であっても、所属の異なる複数の委員が協力しあって事務局を担当し、その他の委員も発表者の推薦や会場提供等、積極的に学会運営に協力するという体制づくりの必要性を訴えた。その結果、私を含む3人の委員（他の2人は50代と60代）が共同で事務局業務を担当し、さらに他の委員の協力も求めるという条件で事務局を引き受けることになった。しかし、他の2人はその後、勤務校の都合により辞退を申し出たため、この案は撤回となる。その後、前記の橋本氏とともに再度の検討をおこない、和歌山大学准教授の大橋直義氏に協力を依頼し、3人で事務局を担当することとなった。とはいえ、窓口は一本化せねばならないため、近畿大学を事務局とし、私が代表委員を務めることとなった。代表委員就任にともない例会委員長を辞任することになったので、橋本氏に委員長を引き継いでもらい、大橋氏には会則に則り副代表委員となつていただいた。支部制を採っていた時には、支部事務局代表が副代表委員を務めることになっていたが、現行方式に変更後も、副代表委員の設置を妨げないよう、新会則には「副代表委員 一名 代表委員が必要とする場合置くことができる」の条文がある。

事務局の引き継ぎ

新事務局の体制がほぼ決まり、あとは委員会での承認を待つだけとなったが、それに先立ち、新委員選挙がおこなわれた。選挙は、個人会員すべてを被選挙人とし、12月例会の案内（11月送付）に投票用紙（葉書）を同封する。定員は45名であるが、次期代表委員内定者が落選した場合に特別

枠として委員に加えるため1名分の席を残す必要があり、44名を選出する旨を告知している。例会の1週間前に開票し、代表委員・副代表委員・例会委員長ともに当選したため、特別枠は空席のままとし、44名が新委員に決まった。当選者には、当選通知とともに委員就任諾否確認の返信葉書を同封するのであるが、そこに、「これまで以上に学会運営への積極的な協力をお願いする」旨の一文を添えた。委員として当然のことであるが、実際には、任期中に一度も委員会に出席しないという非協力的な委員も少なくなかった。45名という委員定数は、委員としての責任の重さを実感しにくいものかもしれない。現在、どこの大学でも校務負担が増大し、学外業務に携わる余裕がなくなっている一方で、委員に選出されたら引き受けるのが当然という学会の慣習とでもいうべき意識があり、辞退するというケースは非常に稀であった。その結果、名前だけ連ねている委員が増えてきたのだと思われる。しかし、前記のとおり全委員が学会運営に携わるという体制の確立を目指すべく、就任に際して委員の責務を自覚してもらうため、このように記したのである。

さて、開票の翌週、2013年12月14日の例会時の委員会において、次期委員当選者および次期事務局担当者が報告され、承認を得、近畿大学で事務局を受け入れることが正式に決定した。なお、大学においては、私の所属する文芸学部文学科日本文学専攻で報告し、了承を得た。併せて、日本文学専攻共同研究室に、会誌のバックナンバー等を置く許可も得た。

学会の会計年度は3月締めであるが、例会等の催しは12月例会で終了するため、前々本部事務局の東洋大学から龍谷大学に引き継ぐ際、4月からすぐに事務局業務に取りかかれるよう1月から事務局を移すということになり、近畿大学での受け入れ時もこれを踏襲した。よって、12月例会終了後、すぐに資料類一式やバックナンバーが龍谷大学から送られてきた。また、新事務局用の封筒や学会印の発注もおこなった。

事務局運営の補助として、運営委員を事務局が指名することができるのであるが、近畿大学・和歌山大学・摂南大学ともに本学会会員である院生等がいらないため、所属大学にかかわらず、関西在住で研究上の交流のある

柏原康人・礪波美和子・浜畑圭吾・船田淳一・吉田唯の各氏、および事務局とは地理的に離れているが、関東在住の近藤香・高橋悠介・田中幸江の各氏、計8名に依頼した。なお、近藤氏は前々本部事務局であった東洋大学で、礪波氏は同支部事務局の奈良女子大学で、浜畑・吉田両氏は前本部事務局の龍谷大学で、それぞれ運営に携わった経験があり、初めての事務局運営に際し、非常に心強い存在であった。特に吉田氏には、会計担当者として定期的に近畿大学までご足労いただき、会計業務のみならず、事務局運営全般にわたる助言・協力を賜った。限られた事務局運営費からは交通費すら十分に支払えずに心苦しかったが、2015年度には本学に非常勤講師（法学部・薬学部）として出講することとなり、出講日に合わせて会計業務その他を依頼している。

ところで、例会等の催しのない1～3月は、4月から本格的に始動する事務局業務に向けての準備のほか、1月には日本文学関連学会連絡協議会に仏教文学会代表として参加、3月には委員会を開催した。委員会は、4月・6月・12月の例会と9月の大会の際に開催するほか、3月には委員会のみを開催するのである。事務局を受け入れて最初の委員会であったが、会場は前本部事務局の好意に甘え、龍谷大学を提供していただいた。

1年目の例会・大会

事務局1年目である2014年度には、3回の例会、1回の大会をおこなった。概略を以下に示す。

◆4月例会

期日 2014年4月26日（土）

会場 大東文化大学板橋校舎

開会の辞

大東文化大学 檜垣 孝

研究発表

『狗張子』巻四ノ七「霞谷妖物の事」小考—深草元政と浅井了意の文学的関連性に絡めて—

お茶の水女子大学大学院生 木村迪子
富士山と法華信仰—初期日蓮教団をめぐる諸問題を中心に—

日蓮正宗教学研鑽所 長倉信祐

『日本霊異記』と『金剛般若經集驗記』

—経典の持つ「力」をめぐる—

大東文化大学 山口敦史

閉会の辞

近畿大学 藤巻和宏

4月例会は、テーマを定めない自由発表として研究発表者を公募したところ、応募、および前事務局からの打診によって3名の発表者が決まった。会場は、かつて委員を務めたこともある檜垣孝氏により大東文化大学板橋校舎を提供していただいた。例会開始に先立ち、12時半から委員会、例会は14時から17時、終了後、17時半から懇親会を開催。

◆6月例会

期日 2014年6月14日（土）

会場 龍谷大学大宮学舎

開会の辞

龍谷大学 大取一馬

シンポジウム「地獄絵を謎解く」

閻魔図像を読み解く—聖衆来迎寺蔵「六道絵」閻魔王庁幅における滅罪の思想—

共立女子大学 山本聡美

室町時代後期から江戸時代にかけての六道図像の変容

愛知教育大学 鷹巣 純

立山曼荼羅の図像を読み解く—目連救母説話図像と越中国南砺系チョンガレ台本—

高志の国文学館 福江 充

コメント・司会

大東文化大学非常勤講師 田村正彦

閉会の辞

和歌山大学 大橋直義

6月例会は、私が例会委員長だった頃に企画を打診した田村正彦氏を中心として、右のシンポジウムを開催。前代表委員の大取一馬氏に、龍谷大学

大宮学舎を提供していただく。12時半から委員会、14時から17時に例会、17時半から懇親会。

◆大会

期日 2014年9月20日・21日

会場 学習院女子大学

第1日目 9月20日(土)

会場校挨拶

学習院女子大学国際文化交流学部長 伊藤守幸

開会の辞

学習院女子大学 徳田和夫

シンポジウム「東西宗教における〈異端〉」

中世キリスト教世界の形成と異端問題—「カタリ派」迫害への道筋と
異端審問による刑罰と赦し—

近畿大学 図師宣忠

持金剛の教団—異端と正統が交錯するインドの大乗仏教—

日本橋学館大学 杉木恒彦

南北朝動乱期における密教と神祇

—〈性〉をめぐる異端的教説の水脈—

摂南大学 小川豊生

宗論・相論とその時代の物語—『改偏教主決』を中心に—

明治大学 牧野淳司

司会

近畿大学 藤巻和宏

第2日目 9月21日(日)

研究発表

『法華験記』収録話と説法

名古屋市立大学大学院生 市岡 聡

文学作品における土葬から火葬への書き換えをめぐる

奈良女子大学大学院生 早川華代

八巻本『発心集』の前六巻と後二巻における往生論

日本学術振興会特別研究員 森新之介

一遍上人の和歌表現をめぐる

大正大学 山本章博

久間八幡宮所蔵『八幡宮愚童記』の基礎的考察

学習院女子大学非常勤講師 伊藤慎吾

「収集・書写・制作」— 19 世紀における寺社縁起受容—

京都精華大学非常勤講師 鬼頭尚義

『宝物集』—「五戒」異同考—「提謂長者譚」を手がかりにして—

大正大学 大場 朗

閉会の辞

近畿大学 藤巻和宏

前々事務局時代までは5～6月に大会をおこなっていたが、新体制となった際に開催時期を9月に移動した。5～6月は中世文学会や説話文学会という近接分野の学会の大会も開催され、日程調整が難しいということもあったためである。しかし、仏教文学会には寺院関係者も少なからず在籍しているため、9月に開催する際には彼岸と重ならないよう注意する必要がある。この年は、会場校や事務局の都合により、この日程しか選択の余地がなかったのであるが、20日が彼岸入りであったため若干の苦情も出ていた。

会場は、委員の徳田和夫氏により学習院女子大学を提供していただいた。これまでは、本部と支部の事務局がそれぞれ大会会場となるケースが多かったが、前記のとおり事務局への負担集中を分散する方針へと転換したので、事務局校以外の委員に会場受け入れを打診していた。また、関東と関西で1年ごとに大会を開催するのが地域的なバランスのうえでも望ましいのだが、単一事務局制となった現在、事務局校以外にも大会会場を引き受けていただくことは不可避である。

大会の際には、案内に出欠葉書を同封し、また、初日の懇親会費や2日目の弁当代の振り込み用紙を同封することもある。当日に会場でそれらの費用を徴収する手間を省くためであるが、その場合は学会費用の振替口座とは別に、大会用の口座を開設することになる。しかし、徳田氏は運営に携わる伝承文学研究会の大会のノウハウがあり、そちらでは当日徴収方式でも特に問題が生じなかったということもあり、別口座は開設しなかった。出欠葉書は、これによって参加者名簿を作成するのだが、宛先を会場校とする場合と事務局とする場合とがある。今回は、それまで事務局校の仕事

であった会場提供を依頼しているということで、また、出欠葉書によって会員名簿掲載情報の修正確認をする必要もあり、宛先を事務局とし、出席者の集計も事務局でおこなった。

初日のシンポジウムは、大橋副代表委員の発案で、当初は「戦争」をテーマとするものを検討していたが、パネリストの都合が付かずに翌年に持ち越すこととなり、代わって私が前記の「東西宗教における〈異端〉」を企画した。藤巻和宏編『聖地と聖人の東西一起源はいかに語られるかー』（勉誠出版、2011年）等、比較宗教学系の研究は私のサブテーマのひとつでもあるが、その方向性で検討した結果、このテーマに至った。フランス中世史研究者である同僚（文芸学部文化・歴史学科）の図師宣忠氏や、これまで何度か共同研究をおこない前掲書にも執筆を依頼していた宗教学研究者の杉木恒彦氏らの協力も得て、日本仏教だけにとどまらない広範なテーマを議論することができたと思う。

2日目は、7名による研究発表。中世文学会や説話文学会でも、大会初日にシンポジウムか講演、2日目に研究発表というケースが多く、本学会もそれを踏襲している。午前と午後に3～4名ずつで計6～8名が妥当な人数というのが共通認識となっているが、近年は他学会でも6名を集めるのにも苦労するという話をよく耳にする。しかし、今回は案に相違して8名の応募があった。うち1名は急病により発表を辞退することとなったが、7名でも十分に充実した研究発表であった。研究発表の司会者は、大会案内の時点で決まっているという学会もあるが、本学会では事前にそこまで決めるのが難しいため、初日の委員会で参加者名簿を見て翌日の研究発表の司会者を決めるというのが通例である。しかし、前日に決めるのはあまりにも急であるため、大会への出欠葉書を見て、事前に打診をしていた。委員会での審議の時間も節約できるので、今後もこの方式を進めていきたい。

初日の12時から委員会、14時から17時半にシンポジウム、18時から懇親会。2日目は9時半から12時25分に午前の部、昼休みに50分、総会に45分を取り、14時から午後の部を再開、16時半に終了。

なお、土日続く月曜日には、「文学踏査」がおこなわれることが多かつ

たが、これも会場校・事務局の負担軽減のため、必須としないことにした。
9月半ば頃だと、すでに後期授業が始まっている大学も多く、この理由から
も、月曜日の踏査は難しいと判断した。

◆ 12月例会

期日 2014年12月14日(日)

会場 奈良女子大学

シンポジウム「南山城と神道灌頂 井手町西福寺所蔵資料をめぐって」

共催 奈良女子大学日本アジア言語文化学研究室

後援 西福寺・井手町教育委員会・奈良女子大学地域連携センター

開会挨拶 奈良女子大学 千本英史

住職挨拶 西福寺 八幡覺堯

パネル発表

西福寺の歴史 大阪大学招聘研究員 中山一磨

西福寺と椿井文書 奈良女子大学大学院生 向村九音

西福寺の神道灌頂 茨城大学 伊藤 聡

神道灌頂の復元 早稲田大学非常勤講師 鈴木英之

コメント 山城郷土資料館 田中淳一郎

元興寺文化財研究所 高橋平明

閉会挨拶 和歌山大学 大橋直義

12月例会の前日13日(土)に、同じく奈良女子大学を会場として説話文学会の例会が開催された。これまで何度か、説話文学会と本学会との合同例会がおこなわれたこともあったが、今回は合同ではなく、土日連続開催である。そして、説話文学会例会の終了後には、17時半より両学会合同の懇親会が開催された。

連日開催の場合、2日目の午前中が空白の時間帯となる。大会ならば初日の午後と2日目の全日という日程を組めるが、今回は両学会ともに例会であり、本学会の例会も、本来は土曜の午後に開催することを想定した内容

であった。そこで、日曜の午前中は「早朝散歩」として、シンポジウムに関わる踏査を企画した。14日の9時から13時、奈良交通バスを使用し、奈良市観光センター、井堤寺跡、井手町立山吹ふれあいセンター、小野小町塚、橘諸兄旧跡、聖武天皇ゆかりの六角井戸、井手の玉川堤等を散策した。車中では、京都府教育委員会文化財保護課の伊藤太氏による解説、山吹ふれあいセンターでは井手町教育委員会の茨城敏仁氏による展示解説がなされた。

シンポジウムは、西福寺に所蔵される神道灌頂資料の調査報告であり、西福寺をはじめ前記複数機関の後援を得て、奈良女子大学日本アジア言語文化学研究室との共催という形で開催された。この企画は、早朝散歩も含め、委員である千本英史氏によるものである。

13時半から17時にシンポジウム、委員会は変則的にシンポジウム終了後の17時15分からおこなった。

これらの例会・大会のほか、2015年3月10日（火）には、近畿大学東大阪キャンパスにて委員会を開催した。12月例会後の委員会では3月14日（土）と決定したが、文芸学部教員会議と重なったことにより、10日に変更したのである。また、その他の事業として会誌と会員名簿の刊行があるが、これらについては別章にまとめて記載する。

2年目の例会

事務局2年目である2015年度には、3回の例会、1回の大会をおこなった。ここではまず3回の例会について概略を記し、近畿大学を会場として開催した大会については次章に記す。

◆4月例会

期日 2015年4月18日（土）

会場 四天王寺大学藤井寺駅前キャンパス

開会の辞

和歌山大学 大橋直義

研究発表

『徒然草』第十一段再考—囲いは盗人避けに非ず—

大阪府立大学大学院生 池上保之

いくさ語りと禅僧—『臥雲日件録跋尤』を通じて—

四天王寺大学 源健一郎

東照宮祭礼の創始と天台系法会の再編—徳川頼宣による東照社小祥祭

と和歌祭を中心として—

和歌山大学 吉村旭輝

閉会の辞

近畿大学 藤巻和宏

4月例会は、前年度と同じくテーマを定めない自由発表として研究発表者を公募したが、集まりが悪く、大橋副代表委員の同僚である吉村氏に、会員外であるが発表を依頼した。本来、大会以外にも自由発表・公募という形式で例会をおこなうことは、若手研究者が気軽に発表できる機会を増やすという意図だったのであるが、院生等からの申し込みが少なく、結局は事務局が中堅・ベテラン研究者に依頼するケースが多いので、今後は4月例会でもシンポジウム等をおこなう可能性も考慮に入れるとの合意がなされた。

会場は、委員であり例会委員でもある源健一郎氏より四天王寺大学藤井寺駅前キャンパスを提供していただいた。源氏には、そのみならず自ら研究発表もしていただいた。例会開始に先立ち、12時半から委員会、例会は14時から17時、終了後、17時半から懇親会を開催。

◆ 6月例会

期日 2015年6月6日（土）

会場 明治大学駿河台キャンパス

開会の辞

明治大学 牧野淳司

シンポジウム「夢記研究の現在」

平安時代における僧侶の“夢記”・統一十世紀～十二世紀—

京都大学非常勤講師 上野勝之

『明恵上人夢記』をめぐる研究の可能性
〈夢と表象〉研究と「夢記」の位置

成蹊大学 平野多恵

国際日本文化研究センター 荒木 浩

司会

摂南大学 橋本正俊

閉会の辞

近畿大学 藤巻和宏

6月例会は、かつて委員・例会委員であった牧野淳司氏に会場を提供していただき、また、橋本例会委員長が委員の荒木氏らに打診し、荒木氏が中心となって進めているプロジェクトの成果報告の一環として、右のシンポジウムを開催。12時半から委員会、14時から17時に例会、17時半から懇親会。

◆ 12月例会

期日 2015年12月5日（土）

会場 キャンパスイノベーションセンター東京

開会の辞

近畿大学 藤巻和宏

シンポジウム「寺院資料調査から拓く文学研究」

寺院資料調査と文学研究

信州大学 渡辺匡一

寺院聖教目録の再構築と活用方策—いわき宝聚院聖教を基盤として—

立教大学 原 克昭

地方寺院における漢籍の受容をめぐる

いわき明星大学非常勤講師 門屋 温

寺院における初学をめぐる—良住堅東の例をもとに—

日本学術振興会特別研究員 目黒将史

明治期の寺院における説草集の編纂をめぐる

東北大学 河内聡子

司会

門屋 温

閉会の辞

大正大学 大場 朗

4月例会と9月の大会（後述）を関西で、6月例会を関東で開催したため、12月例会は関東で開催すべく企画を進めていた。しかし、なかなか会場が確保できず、変則的に関西で、あるいはその他の地域での開催も検討したが、結局はキャンパスイノベーションセンター東京を借りることとなった。当センター利用可能大学に和歌山大学が含まれており、大橋副代表委員名義で借りることができたのは幸運であった。しかし、大学会場と異なり会場校のスタッフの協力が得られないこと、使用料が例会会場費として計上していた額を上回ること等の問題もあったため、今後はよりいっそう、会場提供の面でも委員への協力を強く求めることにしていきたい。

本シンポジウムは例会委員の門屋温氏による企画であり、門屋氏と委員の渡辺匡一氏らが中心に調査している福島県・長野県の寺院調査の成果報告であった。12時から委員会、13時半から16時半に例会、17時から懇親会。近畿大学事務局最後の例会ということで、閉会の辞は次期代表委員である大場朗氏にお願いした。

近畿大学での大会開催

順番は前後するが、2015年9月12日・13日に近畿大学で開催した大会について、学内での準備状況とも併せてここに記す。

前記のとおり、事務局の負担を軽減すべく、例会・大会はなるべく事務局校以外で開催するという方向で進めており、実際に複数の候補があった。しかし、日程の調整に難航し、結局は近畿大学で開催することとなった。

シンポジウムパネリストの都合や、他学会との兼ね合い等との関係で、この日程以外の開催は不可能であった。彼岸とは重ならないものの、大会初日の12日は大学院入試と重なる可能性が濃厚であった。しかし、文芸学部（A館）全館を使用するわけではないので、問題はないと考え、大学院研究科長・事務部長の許可を得たうえで、この日程で進めることにした。

当日の運営に関わる人員は、事務局運営委員のほか、前本部事務局の龍谷大学からも来ていただき（うち、やや遠方から来る3人はゲストハウス

に宿泊できるよう手配した)、また、近畿大学の学部生・大学院生にも手伝いを依頼した。事務局運営委員や龍谷大学関係者には、謝金を学会の大会運営費から支払い、近大生分は科研費の間接経費から支払った。大学によっては、学生が学会業務を手伝うのが当然という認識で、事務局や会場を引き受ける際にはゼミ生等無給で動員するのが常であると仄聞する。院生、特に研究者志望の院生にとっては、この種の仕事を覚えることは有益でもあり、一概にこのことを批判することはできないが、ここではことの良し悪しを判断することは避けておこう。しかし、少なくとも近畿大学大学院総合文化研究科、あるいは文芸学部にはそのような“文化”はない(はず)。また、私自身も前の職場にいた頃から学生に業務を手伝わせる際には、科研費や個人研究費等から謝礼金を支払うようにしていた。しかし、今回のケースでは科研費・個研費からの支出はできず、大会運営費も限りがあるので、十分な人数の学生を動員するのは難しい。どこから費用を計上しようかと考えていたところ、文芸学部ではこの年から科研費の間接経費を採択者の裁量で使用できるようになった(2015年6月の文芸学部教員会議での私の発議と、山中博之事務部長の迅速な対応の成果である)。これを使用することはできないかと考え、学術研究支援部とも協議した結果、大会を文芸学部との共催とすれば可能であるとの回答を得た。よって、この大会は近畿大学文芸学部との共催である。すでに6月の委員会は終了していたため、全委員に共催としたい旨を連絡して承諾を得、大会案内にもそのように記した。

8月上旬に大会案内の発送を済ませたが、その直後、関連出版社数社にメールで出店の打診をした。学会会場には、出版社が出店し、書籍を学会価格で販売することがある。学会情報を見て、それなりの売り上げが期待できる場合には出版社が会場校に出店の可否を尋ねてくるのが常であるが、問い合わせが五月雨式に来到と対応が大変であるため、出店の可能性のある出版社数社にこちらからまとめて連絡をし、申し込み期限を決めたのである。結果、和泉書院、汲古書院、勉誠出版、法藏館、三弥井書店、臨川書店の6社から申し込みがあった。

大会を開催する際、大学案内等を配布する大学も多い。本学での大会開催にあたり、「ファッション雑誌のような大学案内」として話題になった『Kindai graffiti』を配布したいと考え、用意してもらった120部を発表資料一式とともに封筒に詰めた。それなりに好評であったようだ。

大会のプログラムを以下に示す。

◆大会

期日 2015年9月12日・13日

会場 近畿大学東大阪キャンパス

第1日目 9月12日(土)

開会の辞 近畿大学 藤巻和宏

会場校挨拶 元近畿大学教授 西田耕三

シンポジウム「戦争と鎮魂」

軍記物語と鎮魂 青山学院大学 佐伯真一

戦争とシャーマニズム—死者たちの声を語る—

学習院大学 兵藤裕己

満州国と「合祀」—建国忠霊廟の創建と宣伝—

慶應義塾大学 小川原正道

コメンテーター

恵泉女学園大学 佐谷眞木人

司会

和歌山大学 大橋直義

第2日目 9月13日(日)

研究発表会

「気多神社古縁起」と謡曲〈鶉祭〉 早稲田大学大学院生 山吉頌平

『八幡宮寺巡拝記』と『平家打聞』、『神道集』

佛教大学総合研究所特別研究員 筒井大祐

近世高野山の神道関係資料にみる愛染明王信仰について—遷宮に使用

する八葉蓮華を中心に—

近畿大学非常勤講師 吉田 唯

山鹿文庫本『発心集』の調査と検討

二松学舎大学非常勤講師 神田邦彦

北原白秋の信仰と生涯—新出史料「信心」(『世界の日蓮』)の背景をめぐって—
日蓮正宗教学研鑽所 長倉信祐
石清水権別当宗清願文考 日本学術振興会特別研究員 中川真弓
二つの『因果経』—古代・中世文学と『善悪因果経』—

成城大学 小林真由美
閉会の辞 和歌山大学 大橋直義

会場は、A館最大の301教室。そのほか、委員会会場、シンポジウムパネリスト控室、会場スタッフ控室、休憩所、書籍販売スペースとして3階の中教室を5部屋押さえた。

大会初日はやはり院試と重なったため、試験本部と試験会場のある2・4階には立ち入らぬよう大会案内に記し、会場でもアナウンスした。しかし、書籍販売スペースで出版社各社が販売ブースを作るため机と椅子を移動している最中、その真下の教室で筆記試験がおこなわれていることに気づき、作業を中断していただいた。後日、試験監督を担当していた教員に確認したところ、上から音は聞こえたが、特に苦情は出なかったとのことである。

会場校挨拶は、当初は学長に依頼しており、大会ポスターの原稿にもそのように書いていた。しかし、多忙につき辞退との回答をいただき、初校で名前を削除し、会場校挨拶を空欄としたポスターを作成した。その後、仏教文学会の会員でもある元近畿大学教授(2011年3月退職)の西田耕三氏に依頼し、当日、ご挨拶をいただいた。

初日は、前年度から暖めていた、大橋副代表委員の企画によるシンポジウムである。折しも戦後70年、そして安保法案をめぐる世論が揺れているタイミングで「戦争と鎮魂」という企画がなされると、どうしても政治的な文脈で理解あるいは誤解されることが懸念された。前月には軍記・語り物研究会で「近代日本と軍記物語—戦争と英雄像—」というシンポジウムが開かれたほか、学会・研究会のみならず、戦争に関わる種々のイベントが各地で開催されていた。左右いずれにしても政治色の強いものも少なくなかったが、本学会、あるいはこのシンポジウムまでもがそういう色で見

られるとしたら本意ではない。

懇親会は、A館に近接するブロッサムカフェの3階多目的ホールでおこなった。ケータリングは指定業者である淀川食品に依頼したが、近畿大学での懇親会に近大マグロを期待する声も多かったため、マグロのみアマリン近大から取り寄せることも検討した。しかし、マグロの一部を切り売りすることはできないとのことで、1匹すべてを消費するには200人程度の規模のパーティーが想定されるという。参加人数は50人程度と見積もっていたため、断念せざるを得なかった。

2日目は、7名による研究発表。午前3人、午後4人という配置。前年同様、司会者も事前に決めておいた。

初日の12時から委員会、14時から17時半にシンポジウム、18時から懇親会。2日目は10時から12時15分に午前の部、昼休みに50分、総会に45分を取り、13時50分から午後の部を再開、17時に終了。

なお、委員会には昼食を済ませてくるようお願いするのが常であるが、会場スタッフやシンポジウムパネリスト分の弁当と一緒に、委員会出席者分の弁当も大会運営費から用意した。2日目の弁当は、一般参加者分は有料で、懇親会費とともに事前に入金してもらったほか、余った分を当日販売した。

2日間の参加者数は、前年度に比べると少なかった。近畿大学東大阪キャンパスは、西早稲田駅に近接する学習院女子大学ほど交通の便はよくないにせよ、それほど不便な立地でもないの、ほかの要因があるのだろう。両日とも、それなりに魅力的な内容だと思われるが、もしかしたらシンポジウムから政治的なニュアンスを感じ取って参加を控えたという人も、なかにはいたのだろうか。政治問題を敬遠する傾向が強いと言われる日本文学研究者（例えば歴史学系の学会と比して、政治的な声明を出す学会が非常に少ない）を対象とした学会運営という問題を考えると、今後はこうした点も考慮に入れる必要があるのかもしれない。

会誌・会員名簿の刊行

さて、2年間で開催した計8回の例会・大会を概観してきたが、それ以外の事業として、会誌・会員名簿の刊行がある。

本学会は、会誌を年に1回、会員名簿を2年に1回刊行している。2014年4月30日に『仏教文学』第39号、2015年4月30日に第40号を刊行し、現在は第41号の刊行準備中である。また、会員名簿は2014年10月15日に刊行した。

以前は事務局校が適宜印刷所に印刷・製本を依頼していたが、現在は出版社の法蔵館に依頼している。印刷所よりは割高であるが、出版社に依頼することのメリットは編集委員の業務軽減にも繋がるので、妥当な選択であると思われる。

以下に、39号、40号の目次を掲げる。

◆ 39号

〈平成25年度大会講演〉

近世文学にあらわれた熊野比丘尼	根井 浄
日本と東アジアの〈仏伝文学〉—『釈氏源流』を中心に—	小峯和明

〈平成24年度大会講演〉

中世宗教テキストとしての和歌と唱導—賀茂重保と澄憲—	阿部泰郎
〈論文〉	

西行周辺の人物考証—「二見浦百首」作者のこと—	石川 一
無住の内なる梶原—北条得宗家との関わりから—	土屋有里子
大安寺塔中院建立縁起と石清水	生井真理子
蓮体編『礦石集』と地藏寺所蔵文献—地藏関連資料を中心として—	山崎 淳
狂言綺語観の周辺—音楽と唱導をめぐって—	猪瀬千尋

◆ 40 号

〈論文〉

奉納縁起としての奈良絵本

—久間八幡宮所蔵『八幡宮愚童記』をめぐって— 伊藤慎吾

一遍上人の和歌表現をめぐって 山本章博

『宝物集』—「五戒」異同考—「提謂長者譚」を手がかりにして—

大場 朗

『高山寺明恵上人行状』（『漢文行状』）巻中「建仁2年冬比」の段の検討

—「増補説」と「改竄説」をめぐって— 野村卓美

〈例会シンポジウム「地獄絵を謎解く」〉

「地獄絵を謎解く」こと 田村正彦

閻魔図像を読み解く—聖衆来迎寺蔵「六道絵」閻魔王庁幅における滅罪の
思想— 山本聡美

室町時代後期から江戸時代にかけての六道図像の変容 鷹巣 純

立山曼荼羅の図像を読み解く

—目連救母説話図像と越中国南砺系チョンガレ台本— 福江 充

〈大会シンポジウム「東西宗教における〈異端〉」〉

東西宗教における〈異端〉 藤巻和宏

中世キリスト教世界の形成と異端問題

—「カタリ派」迫害への道筋と異端審問による刑罰と赦し— 図師宣忠

持金剛の教団—異端と正統が交錯するインドの大乗仏教— 杉木恒彦

南北朝動乱期における神祇と密教—正統と異端をめぐって— 小川豊生

宗論・相論とその時代の物語 牧野淳司

例会・大会における講演やシンポジウムは原則として執筆を依頼し、投稿論文は査読を経て採否が決まる。例会・大会での研究発表に対し事務局が投稿を依頼することはなく、口頭発表の有無にかかわらず投稿されたものは平等に査読される。

論文のほか、巻末に彙報として前年度の活動記録、会員名簿の訂正、

前々年度の決算報告、前年度の予算案、前年度の入退会者、住所不明者、役員名簿（委員、編集委員、広報委員、例会委員、事務局運営委員、監事、および名誉会員）、会則、投稿規定、事務局だよりを載せる。しかし、会員名簿の訂正は、40号より掲載を取りやめた。会員のみに配布される名簿と違い、図書館等にも納本される会誌に、住所等の個人情報が掲載されることに抵抗があるという会員からの意見に対応した措置であるが、それまでそこに思い至らずに掲載していたことは軽率だったというほかない。会員名簿が2年に1度の刊行であるため、住所変更等を毎年反映することができなくなるが、やむを得ない。

奥付は原則として毎年4月30日であるが、実際の刊行はこれより若干遅れることもある。例会等の案内はその約1ヶ月前に発送するのであるが、5月上旬頃までに刊行できれば6月例会の案内に同封でき、送料の節約になる。39号はそれが可能であったが、40号は間に合わず、会誌単独で発送した。

前々事務局時代より、会誌のデジタル化の計画があった。前身である『仏教文学研究』も含め、DVD化して販売（出版社に委託）という案もあったが、現在は科学技術振興機構のJ-STAGE Liteでの公開を想定している。しかし、事務局の移動ごとに計画が振り出しに戻ってしまうため、デジタル化のためのワーキンググループを設置すべしという意見も出ていた。とはいえ、どこの事務局でも通常業務を捌くのに精一杯であるためか、実現には至らなかった。ただ、現事務局では、現在ホームページを管理している広報委員を改組し、デジタル化を新たな業務として組み込むことを予定している。なお、『仏教文学研究』は法藏館が版權を有し、現在も販売している号があるため、デジタル化は『仏教文学』のみを対象とすることとなった。

学会名・会誌名の字体変更

ところで、冒頭の概略でも述べたが、本学会は「佛教文學會」と、「文」

以外の4文字を旧字体で表記していた。会誌も『佛教文學』である。しかし、過去の会誌その他を確認すると表記の揺れがあることが判明した。特に、新旧で字体が非常に似ている「教」が「教」と表記されることが多く（旧字体であることに気付かなかったケースも多いと思われる）、字体は似ていないが「學」「會」も「学」「会」と容易に入れ替わる。「佛」だけは特殊な意図によりあえて旧字を用いていると思われるのか、「仏」と入れ替わるケースがもっとも少なく、例えば「佛教文学会」等、「佛」字だけが旧字で記されることも多い。

いずれにせよ、表記を統一する必要がある。特に、図書館等で管理上の問題が生じており、どの表記が正しいのかという問い合わせもあった。この問題は、かつて委員会で議論されたこともあるが、「迷った場合は新字で表記するのが無難」という合意を得たのみで、統一には至らなかった。本事務局において、すべて新字の「仏教文学会」とすることを発議し、承認され、正式決定事項として2014年の大会時の総会で会員に報告した。

なお、会誌の表紙には、創刊号以来、北宋版『妙法蓮華經』より集字した「佛教文學」という文字を使用しているが、これは“ロゴ”という認識であり、改めないこととした。

会誌・案内の発送

会誌『仏教文学』は、1989年に第四種学術刊行物の認可を得ている。これにより、第四種郵便物として一般郵便物よりも安価で郵送することができる。しかし、ヤマト運輸のクロネコメール便サービスを利用するようになってから（どの事務局からメール便に切り換えたかは確認できない）は、第四種郵便物として送付していない。第四種郵便物のほうがさらに安価であるとはいえ、封筒を一部開封する等、いくつかの制限があり、メール便のほうが使い勝手がよいという理由であろう。また、メール便ならば定形外であっても定形郵便と同一額で送れるので、例会案内等を折らずに定形外封筒に封入できる。何百部という部数を発送する場合、三つ折りにする

手間が省けることのメリットは大きい。

学術刊行物としての登録を継続するために、事務局が移動するごとに新事務局情報を報告する必要があるのだが、メール便を利用している限り、今後第四種郵便物として送付することはないだろうと考え、登録廃止の手続きをした。これをするにより、会誌に広告を掲載することも可能となり、広告収入も見込めるという判断もあった。しかしこれは早計であり、掲載量が全紙面の3分の1を越えなければ、学術刊行物でも広告掲載が可能であるということに、廃止手続き完了後に気付いた（実際、バックナンバーを確認すると、過去にも広告を掲載していた号がある）。

さらに、2015年3月31日をもってクロネコメール便サービスが廃止となった。問い合わせたところ、後継サービスのクロネコDM便によって例会案内等の薄いものは送付可能であるが、会誌は不可能とのことである。ただ、経過措置ということで、第40号はDM便で送ることができた。しかし、次期事務局では不可能となるので、他の手段を検討していただくほかない。選択肢を増やすために、現事務局で学術刊行物登録のし直し手続きの確認をしたが、認可には時間がかかりそうである。

なお、発送作業の際には、事務局運営委員のほか、近畿大学の学生に手伝いを依頼した。謝金は事務局運営費から支出した。

会誌への広告掲載

前記のごとく、学術刊行物登録の有無にかかわらず広告掲載は可能なのだが、誤解に基づいていたとはいえ、ともかくも、広告料収入によって少しでも予算を潤すべく、関連出版社に広告出稿を打診することとなった。第40号では4社から出稿いただき、第41号編集集中の現在も数社に打診中である。

広告掲載は現事務局が始めたことであり、次期事務局の業務負担軽減のため、出稿打診はデジタル化とともに、広報委員の新たな業務とする予定である。

会費滞納者への対応

本学会の年会費は 3500 円。学生と一般との区別はなく、購読会員も同額である。

おそらく多くの学会で問題となっているであろうが、会費滞納者への対応には本学会も苦慮している。会費請求時に、滞納者には滞納額を示して当該年度分と併せて請求しているが、回収率は非常に悪い。試みに、2 年以上滞納している会員の総滞納額を計算したところ、120 万円を超えていた。

学会というのは一般社会から見るときわめて特殊な世界であり、なにかにつけて微温的な雰囲気がある。滞納者に会費を督促するという“当たり前”の行為すら、あまり厳しくすることは憚られるのか、これまでの事務局も厳しい督促はおこなっておらず、長期滞納したまま除名処理してしまった会員も多い。除名者のデータはすでになく、この損失額も含めたら、いったい 120 万円の何倍に膨れあがるのだろうか。

かつては 5 年滞納で除名という内規があったようだが、委員のなかにも 5 年滞納している者がいて、委員を除名するわけにはいかないという理由で、暫定的に 7 年となっていた。しかし、7 年もの長期にわたる滞納が可能、しかも滞納したまま退会しても滞納金を請求しないというのでは、会費を払っている多くの会員に対し失礼である。他学会の事例であるが、会費滞納額が嵩んだため会誌刊行費を捻出できなくなり、会誌の品質を落としたという本末転倒が現に起きている。会費を払っている者が、会費滞納者によって、本来受けられるはずのサービスを受けられないという状況を黙認することは、学会事務局として許されないことであると考える。

1 年目にはまだ状況を十分に把握できていなかったが、2 年目には取り立てを強化すべく、4 年以上滞納している会員への会誌・例会案内等の送付を停止し、また、滞納額を支払うか、当該期間に送った会誌を返還するかという選択肢を提示した。郵送とメールで何度か連絡し、「ご対応いただけない場合は法的措置を検討しております」と伝えた。「法的措置」は、この時点では「検討」に過ぎないが、実際におこなうとしたら多大な労力を要し、

リスクもともなう。事務局運営委員のなかからも、このやり方には反対意見も出ていた。しかし、波風を立たせることを嫌い、長期滞納者に目をつぶるというこれまでの“仲良しクラブ”的な在り方は、公的組織である学会として許されるものでないということを繰り返し説明し、なるべく法的措置を採る前の段階で解決できるよう努力するということで、合意を得ることができた。

実際に、これによってそれなりの人数の長期滞納者から支払いがあった。それでも反応のない会員には、事務局委員で手分けして電話連絡をし、さらに何人かの滞納者から支払いがあった。だが、なかには「前々事務局時代に退会を申し出ているにもかかわらず、その後も勝手に送られてくる」と、怒りを露わにする会員もいた。前々事務局から前事務局への引き継ぎの際に漏れがあったと思われる、現事務局ではまったく知り得ない情報であるが、会員にとっては「事務局の責任」でしかない。その他、電話で本人あるいは家族と話したことによって初めて知り得た特殊事情もあり、法的措置には慎重を期する必要があることに改めて思い至った次第である。

その他の業務

以上、主な業務を中心に記したが、学会事務局業務は多岐にわたり、これ以外にも種々の仕事がある。そのすべてを書くことは煩雑になるので避けるが、もっとも神経をすり減らすのは、日常的に受け続ける様々な問い合わせへの対応である。メールによる問い合わせであれば、時間のあるときに対応すればよいのだが、電話の場合はそうはいかない。大学教員は研究室に常駐しているわけではないし、在室中も学会業務だけに専念できるわけではない。しかし、学会封筒や会誌等に学会事務局の連絡先として電話番号（大学代表）を載せているからには、先方はすぐに解決したいという目的で電話をかけてくるのである。

特に、図書館からの問い合わせは、メールよりも電話で来るケースが多い。例えば、会誌を購入している図書館からの、こちらが送った／送るべ

き書類（見積書・納品書・請求書等）について確認したいという問い合わせの場合、その場で即座に回答することはほぼ不可能である。こちらは何十という図書館に書類を送り、記載内容についてはそれぞれ異なる指示をされているため、とても把握しきれものではないし、授業準備や他の校務の最中であれば、すぐに資料を確認することもできない。連続で複数の大学図書館からの電話を受けた時には、どこからの電話であったか正確に記憶することもできなかった。すぐに対応できず、問い合わせ内容も複雑だった時に、「封筒に記載しているメールアドレスのほうにお願いします」と言ったら、「この部署には書類のみが回されてくるので、封筒はありません」とのことであった。それ以来、見積書等にもメールアドレスを記載するようにしたら、電話での問い合わせがやや少なくなったように感じる。

また、宗教団体と勘違いしているかのような質問や依頼等が来ることもある。本学会は学術団体であり、そのような問い合わせには対応できないため、メールや郵便の場合は黙殺している。

年に2回であるが、日本文学関連学会連絡協議会への参加という業務もある。冒頭の概略にも示したが、日本文学系の20学会により組織された団体である。1月末と7月末頃に、東京の国文学研究資料館（国文研）で開催される。各学会の取り組みを報告し、共有することが中心の、緩やかな集まりである。会場となる国文研は、会場を提供しているだけで、上部団体という位置付けではないのだが、国文研のプロジェクトの紹介や参加・協力の打診がなされることもある。例えば、国文研が2014年度より採択された文科省の大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」への協力等である。協力は任意であるが、こうした事項も含め、議事録は学会に持ち帰り、委員会や総会で報告・審議している。

2015年1月には、本学会から「IT環境下に於ける情報の発信と共有に関する改革案」と題して議題を提案した。これは、日本学術研究支援協会（JARSA）というサイト（<http://jarsa.jp/>）の運営者である木下佳美氏（本学会例会委員の中山一磨氏からの紹介）から依頼を受けての提案であった。

木下氏は、他領域に比して遅れている人文系・日本系の学会における IT 環境を改善し、よりよい情報発信・共有を可能とすべく、まずは個々に点在する諸情報を JARSA サイトに集約することにより、単なるリンク集ではなく、同一水準で隣接領域の動向を一覧・利用できるサイトの構築を目指しており、協議会参加学会から JARSA に情報提供を依頼するというものであった。しかし、併せて提案した協議会サイトのリニューアルが主目的の“売り込み”だと思われたのか、目的は果たせなかった。

次期事務局へ

2014 年 1 月に事務局を引き継いだが、2016 年 1 月現在、まだ次期事務局へバトンを渡していない状態である。

「事務局の引き継ぎ」章で述べたとおり、会計年度が 3 月締めであるため、1 月の引き継ぎ時期と一致していない。4 月からすぐに新事務局を始動するための準備期間として、例会等のない 1 月からの 3 ヶ月を充てるという意図であるが、会計の面では非常に面倒なことになる。一方で、準備期間の 3 ヶ月は、事務局が移動していない状態であっても状況は大きく変わらないと判断し、事務局移動の時期も 4 月に変更するよう委員会で提案し、承認を得た。よって、近畿大学での事務局担当期間は、2 年 3 ヶ月ということになる。

大正大学の大場朗氏に次期事務局を打診したのは、1 年目の大会の折りであった。現事務局は、前事務局の 2 年目の冬にようやく決まり、慌ただしく引き継いだので、戸惑いも多かった。その轍を踏まぬよう、次の事務局はなるべく早めに決めておきたいと考えていた。大正大学には大場氏以外にも本学会会員である教員が複数いる。そしてなにより、仏教系の大学であることは、本学会事務局として非常に望ましい環境であろう（なお、前身である仏教文学研究会の設立が決まった発起人総会の会場も大正大学であったという）。さすがにその場で即答していただくことはなかったが、持ち帰って同僚とも相談するとのことであった。後日、承諾の返事をいただ

いたので、12月の委員会で報告。大場氏は委員ではないが、次の委員会からオブザーバーとして、同大学の山本章博氏とともに出席していただいている。

現事務局では、事務局校の人材不足をカバーしてもらうため、関西在住の大橋氏に副代表委員を依頼したが、やはり代表と副代表とは関東・関西に分かれていたほうがよいと考え、副代表委員は大阪府立大学の田中宗博氏に依頼した。2015年10月のことである。

11月には、翌月の例会案内に同封して、次期委員選挙の被選挙人名簿と投票用紙（葉書）を送付した。例会1週間前に開票し、すぐに当選通知と就任諾否確認の返信葉書を送った。今回は6名の辞退者が出たので、次点以下の方々に打診し、同数を繰り上げ当選とした。代表・副代表の大場・田中両氏ともに当選したので、特別枠の1席は埋めず、今回も44名である。

現在、次期事務局に業務をスムーズに引き継ぐため、自転車操業のツケで散逸しかかっている諸資料を整理し、マニュアルの作成を急いでいる。前事務局関係者に事務局運営委員として加わってもらった今回と違い、そして地理的に離れていることもあり、運営上の疑問を極力生じさせない状態で引き継ぎたいと思う。

3月には、近畿大学で最後の委員会（新旧合同委員会）を開催する。そして、4月例会の案内も3月中に発送するが、ここまでの現事務局の業務である。

例会は、すでに6月まで企画を進めているが、これは事務局から独立した例会委員の強味である。

初代会委員として、そして今期の代表委員として仏教文学会の運営に携わり、試行錯誤を繰り返しながらも、種々の新しい試みをしてきたと自負している。批判もあるかもしれないが、研究史の片隅に残る程度の貢献はしたはずである。人文系学問の危機が取り沙汰される昨今、その影響をダイレクトに受ける人文系学会も消滅あるいは統廃合が現実味を帯びてきている。学会運営は、これまでの方法を引き継ぐだけでなく、常にそう

いった状況を勘案しつつ進めてゆかなければならないものだということを実感している。

研究に充てる時間は大幅に削られ、校務にも支障をきたした。前者は自分で解決するしかないが、後者については同僚教職員の十分な理解を得ることも重要である。大学院生時代に学会事務局業務を手伝った経験のある教員は一定数いると思われるが、それが必ずしもすべての教職員に共有される“常識”ではない。私自身は、事務局受け入れの大変さは説明不要で理解してもらえるものと安易に考えていた部分もあったが、これは大きな反省点である。

ともあれ、学会事務局業務は、研究・校務を少なからず犠牲にしなければ不可能であるといえよう。それを補って余りある有益な体験であったことは間違いないが、やはり大変な労力を費やすことになるゆえ、できることならば、今後10年くらいは事務局の受け入れは遠慮したいというのが、現在の偽らざる心境である。

付記

脱稿後の2016年2～3月は、会誌41号編集、委員会の改組、委員会開催等に加え、会計処理を含む事務局引き継ぎ作業が予想以上に難航した。言うまでもなくこの時期は大学教員にとってもっとも多忙な時期であり、それと並行して学会事務局業務をおこなうことの難しさに改めて気付かされた。4月、次期事務局へと引き継ぎ、無事に任を果たすことができた。ご協力いただいた学会・大学関係者に御礼申し上げます。